

番号	名称	解説	年代
	Ⅲ さまざまな本	このセクションでは、千三百年以上の歴史を持つ和書の中から、各時代の写本や版本、特色のある本を選んで紹介し、あわせて書物の周辺に位置する資料も展示します。	
	(1-1) 各時代の写本	日本の写本の歴史は七世紀に始まり、現在に及んでいます。ここでは、その時代の変遷を見ていただくために、各時代の写本の例を選んで展示します。	
	奈良時代の写本	奈良時代の写本で現存するものはほとんどすべて仏書で、その大半が写経です。これらは、現在の所蔵に関わりなく、本来は奈良の諸寺院に伝来したものが中心です。	
	平安時代の写本	現存する平安時代の写本には、仏書以外の国書や漢籍も少なくありませんが、量的にはやはり仏書が主体です。ただし写経の割合は減少し、日本で作られた教理や修法に関する書が増えてきます。	
	鎌倉～南北朝時代の写本	鎌倉～南北朝時代は現存する写本の数も増え、ジャンルも広がってきます。また、著者の自筆本や著作の成立年時に近い写本が残ることも持筆されます。	
	室町時代の写本	室町時代の写本は、現存数が格段に増加し、著者自筆本の伝わるものも稀ではありません。	
	江戸時代の写本	出版が盛んになった江戸時代にも、依然として多量の写本が作られました。時代が近いだけに、現存する量も膨大です。	
	明治時代の写本	明治時代には、和紙に墨で書く写本が普通に作られていました。しかし大局的には、伝統的な写本が書物の世界で重要な役を終えつつあったと言えます。	
	(1-2) 各時代の版本	日本の版本は、平安時代後半以降その事例が増えますが、遺品が多く残るのは鎌倉時代からです。ここでは、鎌倉時代以降各時代の版本の例を展示します。	
	古版本	室町時代以前の版本を、古版本と呼びます。古版本の多くは寺院で出版されたもので、寺院や宗派による名称が付けられています。	
	春日版	平安末期頃から奈良の興福寺で出版された本で、しばしば刊記に法相宗の守護神である春日の神への信仰が表明されていることから、春日版と通称される。法相宗関係の経論やその注釈書が主体。	
	高野版	鎌倉中期から高野山で出版された本で、弘法大師の著作を初め、真言宗関係の経典や教理書が中心。冊子本は粘葉装に装訂され、高野紙という厚手の楮紙を用いるのが特色。	
	五山版	鎌倉中期から、京都と鎌倉の五山を初めとする禅宗寺院で出版された本で、仏書のほか漢籍なども少なくないことと、中国や朝鮮の版本の強い影響が見られることが特色。	
	古活字本	十六世紀の終わりから十七世紀の半ばにかけて、主に木製の活字を用いて印刷した本が多数作られました。これを古活字本と言い、出版地などによる特定の名称を持つものがあります。	
	勅版	天皇が命じて出版させた本。後陽成天皇による文禄勅版（文禄2年〔1593〕刊『古文孝経』、現存せず）と慶長勅版（慶長2年〔1597〕～8年刊『日本書紀神代巻』『論語』など）、後水尾天皇による元和勅版（元和7年〔1621〕刊『皇朝類苑』）がある。	
	嵯峨本	本阿弥光悦の創始した光悦流の書体を持つ一群の版本（大半は古活字本）は、嵯峨の角倉素庵の資金援助で出版されたと言われることから、嵯峨本と通称されている。ただし光悦と素庵の関与については明証がなく、想像にとどまる。	

番号	名称	解説	年代
	伏見版	徳川家康が慶長四年（1599）から十一年にかけ、主に伏見の円光寺で活字により出版させた本。『貞観政要』『吾妻鏡』『周易』『七書』などが知られる。	
	叡山版	比叡山で出版された本。鎌倉時代にもあるが、一般には慶長～寛永期に出版された古活字本を指す。天台宗関係の仏書が中心。	
	慶長元和期の古活字本	古活字印刷が隆盛を迎えた慶長～元和期の古活字本で、後の寛永期のものより概して書型が大きく、文字も大ぶりである。	
	寛永期の古活字本	古活字印刷が隆盛から次第に衰退に向かった寛永期の古活字本で、概して文字が小ぶりである。	
	江戸時代の整版本	古活字本の隆盛が終わった十七世紀半ば以降、再び整版本が主流になりました。古活字本では困難な、絵と文字が入り組んだり、和歌を散らし書きした版面は、整版本ならではのものです。	
	近世～近代の木活字本	江戸時代後期から明治時代にかけて、木製の活字で印刷した本が作られました。これを近世（近代）木活字本と言います。古活字体に対し、平仮名を使用せず漢字と片仮名のみであること、連続活字を用いないことが特色です。	
	近代の整版本	明治時代になっても、江戸時代と同じ方法で整版本が作られていました。しかし木版印刷による新刊本は、大正頃にはほぼ消滅したようです。	
	近代の和装金属活字本	明治時代には、金属活字版という新しい方法で印刷し、伝統的な袋綴の和装本に仕立てた本も多数作られました。	
	(2-1) 絵入り写本	写本の中には、美しく彩色された多数の絵を持つものがあります。本文とともに、絵を鑑賞することを目的に作られているでしょう。ここでは、卷子本と冊子本それぞれの例を展示します。	
	絵巻	物語や説話等を題材に、詞書と絵を交互に貼り継いで卷子本とした絵巻が、平安時代以降多数製作されました。詞書がなく絵のみのももあり、いずれにしても絵を重視した本と言えます。	
	奈良絵巻	江戸初期から前期にかけて製作された絵巻のうち、横型奈良絵本のような画風の絵を持ったもの。多くは物語を題材とする。	
	絵入り冊子写本	絵巻より年代は遅れますが、絵を多く含む冊子の写本も作られました。その代表的なものが奈良絵本です。	
	奈良絵本	室町末期から江戸前期にかけて多数製作された、主に物語を題材とした冊子体の絵本。列帖装の縦型本と袋綴の横型本があり、前者の絵は精緻な描法と鮮やかな色遣いを持ったものが多く、後者の絵は素朴で親しみやすいものが多い。	
	(2-2) 絵入り版本	版本にも、絵を伴うものが少なくありません。ここでは、墨で刷った上に筆を用いて彩色を施した本と、色版を用いて多色刷りをした本の例を展示します。	
	墨刷り彩色本	墨の版で絵の輪郭や黒地部分を刷った上から、筆などで色を付けた本です。江戸時代以降に見られます。	
	丹緑本	江戸初期に刊行された物語などの版本で、挿絵に丹・緑・黄の色を付けたもの。普通の彩色とは異なり、絵のところどころに色を塗る程度で、対象と色の関係もあまり考慮されていないが、独特の味わいがある。	

番号	名称	解説	年代
	合羽刷り本	挿絵の上に、色を塗る部分をくりぬいた型紙を置き、筆や刷毛でその部分を塗って色を付けた本。色版を使わず、多色刷りのような効果を上げられる。江戸中期以降に見られる。	
	色刷り本	墨の版のほか、何色かの色版を用いて絵を色刷りにした本です。	
	多色刷り本	複数の色版を用いて絵を印刷した本。江戸中期から現れ、浮世絵系の絵師が関わり、多くの絵本が作られ、錦絵の発達とも交渉を持った。	

番号	名称	解説	年代
	ちりめん本	明治十八年（1885）から昭和初期にかけて英語など外国語で出版された、日本の昔話や伝説を題材にした小型の絵本。木版多色刷りの挿絵を持つ。紙に縮緬の皺のような加工が施されているので、ちりめん本と呼ばれる。	
	(3) 稿本・清書本・校正刷り	写本のうち、著者自身が製作に関わったものは特定の名称で呼ばれる場合があります、ここではそれについて例をあげて解説します。	
	稿本	著作の完成途上にある下書き本です。何段階かに分かれる場合、それぞれ初稿本・再稿本・三稿本……と言います。	
	清書本	稿本に基づいて清書した本です。定稿本と一致する場合も多いですが、中間段階でいったん清書した本もあります。また、著者の依頼で別人が清書することがあります。	
	校正刷り	活字を組んだ版や彫った版木で試し刷りをしたものに、著者などが訂正の指示を加えた校正刷りが、稀に伝存しています。実際に出版された本とともに展示します。	
	(4) 書物以外の資料	形態的に書物としては扱われませんが、書物に近接した所に位置する一群の資料があります。ここでは、それらの例を展示します。	
	古筆切	古写本の一部を、鑑賞などのために切り取ったものです。手鑑に貼ったり、掛軸に仕立てることもありますが、ここでは切ったままの形のもの展示します。	
	短冊	和歌や連歌・俳諧の発句などを書くための、細長い紙です。鎌倉末期頃に現れ、現在でも広く使われています。	
	掛軸	当初は、仏画を壁などに掛けて礼拝するために考案されたものようですが、後には絵や書などを掛けて鑑賞するためにも用いられました。古筆切や一枚物は、しばしば掛軸に仕立てられます。	
	一枚物	書状・文書や小型の地図など、一紙程度の、比較的小さいものを言います。印刷されたものは一枚刷りと呼ばれます。	
	畳み物	形状としては一枚ですが、比較的大きく、最初から畳んで収納することを前提に作られたもので、大判の地図などがこれに当たります。しばしば、畳んだ時に表に出る部分に表紙が付けられています。	

